

ワクチン—基礎から臨床まで—



日本ワクチン学会 編
 中山哲夫 責任編集
 B5 版/376 頁
 定価 (本体 9,500 円 + 税)
 2018 年 10 月 10 日発行
 株式会社 朝倉書店

麻しん・風しん・おたふくかぜ混合ワクチン (MMR) は 1993 年に事実上中止となり、その後新規ワクチンの開発・導入は二十数年近く凍結状態でワクチン不遇の時代が続きました。一方、欧米ではインフルエンザ桿菌、肺炎球菌ワクチン、多価混合ワクチンが導入され細菌性髄膜炎は激減しました。しかし、わが国ではワクチンで守られるべき疾患で依然として多くの子供たちの命が奪われる状況が続き「ワクチンギャップ」が叫ばれ、これらのワクチンの導入が強く望まれていました。2010 年には補正予算によりインフルエンザ桿菌ワクチン、肺炎球菌ワクチン、ヒトパピローマウイルス (HPV) ワクチンが暫定的に定期接種に組み込まれ、2013 年から正式に定期接種となりました。その後ロタウイルスワクチン、髄膜炎ワクチンと次々に海外からのワクチンが導入されました。

海外からのワクチン導入のみならず日本脳炎ワクチン (マウス脳由来) の勧奨接種中止、麻しん・風しん (MR) ワクチン 2 回接種の導入、そして 3 期 4 期接種の 5 年間のキャッチアップ、2012 年には生ポリオワクチンから不活化ポリオワクチンへの転換、混合ワクチンの導入と、大幅な予防接種法の改正が行われました。さらに B 型肝炎ワクチン、水痘ワクチンが定期接種のワクチンとなりワクチンを取り巻く環境は目まぐるしく変わってきました。

海外で広く使用されてきた有効なワクチンの導入を含めたワクチンの普及により、小児の疾病構造は大きく変わり感染症の占める割合は少なくなり、感染症の脅威が薄らいで感染症が軽く見られてきています。しかし海外からの麻疹の輸入感染、過去の風しんワクチンの予防接種政策のひずみから成人男性の風疹の流行に際して成人へのワクチン接種、グローバリゼーションに伴い渡航者へのワクチン接種とその重要性が高まっています。にもかかわらず、有効性は明らかとはなってはいますが、おたふくかぜ、ロタウイルスワクチンは任意接種のまま据え置かれており今後のワクチンの課題として残っています。

ワクチンの果たしてきた役割は大きく、現在の子供たちは 2 歳までに多くの感染症から免れることになり感染症の恐怖は身近から遠ざかりました。同時接種の問題や接種後の副反応疑いの報告から、2013 年には HPV ワクチンの「積極的な接種勧奨の差し控え」が通達されました。MMR ワクチンや保存剤としてのチメロサルと自閉症の関連といった誤った情報や誤解が氾濫し、予防接種に対する躊躇や不安感が広がりつつあります。しかし、これらに科学的根拠はないことがすでに証明されており、誤解を解くためにも「ワクチン学の教科書」としてまとまった正しい情報を発信する必要があることから日本ワクチン学会により現在の第一人者の先生方におねがいして「ワクチン—基礎から臨床まで」が編纂されました。そのタイトルのとおり個々のワクチンについては臨床医と基礎研究者の先生方に共同執筆していただき、ジェンナーの時代からのワクチン開発の歴史、感染免疫の基礎、将来のワクチン開発、法的な問題まで広くワクチンに関連するテーマを網羅しており、予防接種外来・ワクチン学の座右の書としていただければと思います。

中山 哲夫 (北里生命科学研究所・日本ワクチン学会理事)